

かごしま農36景



「東西東西」

「東西東西、本日の出し物は・・・」といった具合に“東西”という言葉は使われる。が、市町村合併の進む以前には、東〇〇村、西〇〇村といった“東西”が数多く見受けられ、その多くは河川を境界としていた。大隅半島の東西串良も、その一つだ。肝属川の支流串良川と同じ流域に属しながら、2つの町が同河川を挟んで向かい合う。そこには御多分に洩れず、水争いの歴史がある。その象徴が同河川に1キロほど隔てて位置する川原園堰と林田堰の存在。

上流側に位置する川原園堰では、毎春、川の冷たい流れに身を託して流路を塞ぐ柴かけの作業を行う。作業はコンクリートの堰頭部に渡した丸太に、切り出して束にした柴をからめるのだが、5人で10日掛かりという。近頃は水位を自動的に調整して取水する可動堰も珍しくなくなっただけに、柴掛けは原始的にさえ思われる。事実、縄文期の水田といわれる福島県、板付遺跡では木杭を打ち込んだ井堰跡が、また古墳期の愛媛県、古照遺跡などでは合掌式に組んだものが発見されており、これらの井堰では木杭に茅などを編んですき間を埋めたと考えられることから、川原園堰の柴かけは、我が国に稲作が始まった時代の堰造りと似ているといえる。

川原園堰は明治35年に改築。その翌年に両堰は渇水時の配水について紳士協定を交わしている。内容は「川原園堰の流水が堰上零五分（1.5センチ）以下になったら両者立合い、平等に配分する」というもの。だが、昭和9年の大干ばつ時には東西の農民が睨み合い一触即発の危機にあったという。堰の設置は遠く江戸時代、鎖国令発布の頃にさかのぼるというから昭和9年のような出来事や、それ以上に厳しい事件が起きたことは想像にむずかしくない。水の確保に対する先人の苦闘を背景に、流水を完全に遮断しない柴かけの意義は大きかったに違いない。ここに今日まで柴かけが続いている理由があろう。

だが、技術の進歩もあって今や水争いによる“東西”は、人の心に潜む問題の方が大きいのでは。我が国農業は間もなく本格的な自由化を迎える。そうした中で、いつまでも「東西冷戦」はなかろう。米ソ対立も終焉を迎えたではないか。同一水系は手を携える時代に入った。柴かけを「春を呼ぶ風物詩」と呼ぶが、心の“東西”が解けないことには、水はいつ微温（ぬる）むものやら。「東西東西、本日はこれでお仕舞。」

(1995年3月)

◇「かごしま農36景 / 発行:鹿児島県農業農村整備情報センター」より

文:門松経久

写真:福末 光文「モダンな休憩所」第4回かごしまフォト農美展